GAMES OF THE XXIVTH OLYMPIAD SEOUL 1988

目指すはソウルでの日の丸

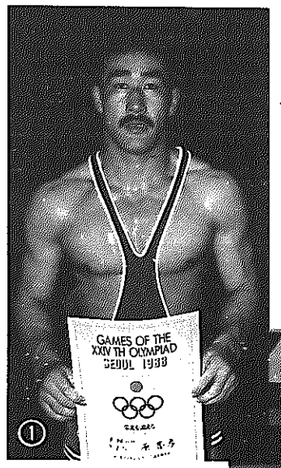
レスリングオリンピック代表に原喜彦さん（上浦出身）

決まった！ 片足タックル

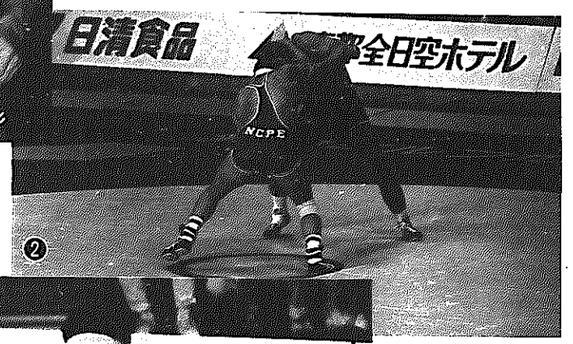
ソウルオリンピックのアマチュアレスリング代表選手に、本市上浦出身で日本体育大学研究員の原喜彦さん（東京都・二十四歳）が選ばれました。

原選手は、フリースタイル七十四キロ級でオリンピック代表選考会に出場し、第一次・二次選考会で優勝。五月五・六日に東京・代々木第二体育館で開かれた、選考会上位四選手による「全日本選手権兼オリンピック代表最終選考会」でも、落ち着いた試合運びで実力の違いを見せて優勝し、代表の座を手にしました。

本市からのオリンピック選手の誕生は初の快挙で、ソウルでの活躍が大いに期待されます。

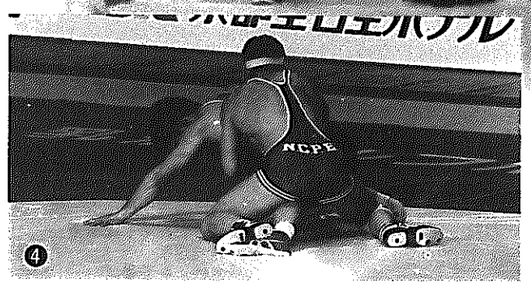


①



②

③



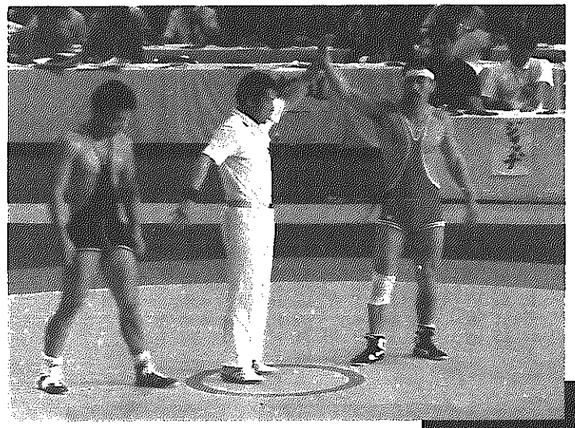
④

①オリンピックへの切符・優勝の賞状を持つ原選手　②お互いに激しい闘志で組み合う。手前が原選手　③原選手の片足タックルが決まり、高橋選手たまらず両手をつく　④原選手、高橋選手のバックをとって1ポイントを追加

何としてもオリンピックに出たい

原選手は、昨年までは一階級下の六十八キロ級の選手でした。このクラスには、ロサンゼルスオリンピック銀メダリストの赤石光生選手（ユナイテッドスチール）がいて、原選手は十一回戦って勝ったのは一回。いつもわずかに及ばず敗れ、国際大会の代表選考から漏れていました。

「世界の舞台（オリンピック）に立たなければ意味がない」と昨年七月の全日本選手権後、一階級上げて七十四キロ級に転向し、代表の切符に挑戦しました。

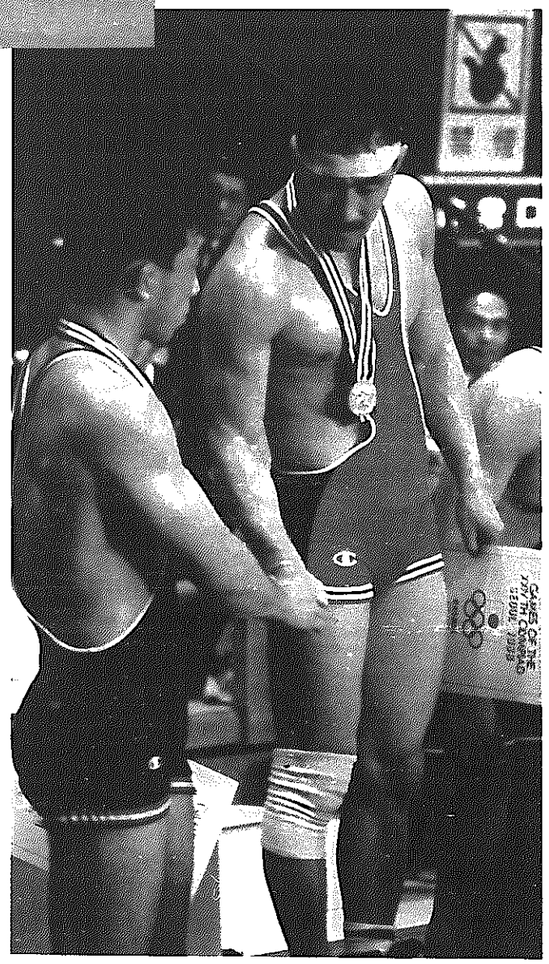


勝つ自信はありました

最終選考会決勝戦の相手は、高橋信明選手（専修大）で、昨年度の全日本チャンピオンでした。

試合は、第一次・二次選考会で首位をキープした自信からか、原選手が積極的に攻め、実力の違いを見せて高橋選手を圧倒し、快勝しました。第一ピリオドは、素早い動きで好調なすべり出しを見せ、3対0でリードしました。第二ピリオドに入っても、父親滋喜さん（四十七歳）の「休まずに攻めろ！」の声援にこたえ、2ポイントを追加。終盤、高橋選手に1ポイントを許したものの、通算5対1の判定で勝ちました。

試合が終了すると、両手を上げマットを一周、日体大の学生たちが応援するスタンドに向かってひざまずき、十字をきって喜びを大きく表現していました。



互いの健闘をたたえ合い 高橋選手と固い握手

原選手のプロフィール

▶**生まれ**　昭和39年2月11日　24歳

▶**サイズ**

身長170センチ、ふだんの体重75キロ

▶**家　族**

父　　滋喜さん（47歳・農業）
母　　朋子さん（46歳・農業）
弟　　晃弘さん（東京都・22歳・エンジニア）
妹　　沙恵子さん（14歳・中学3年）
祖母　シズさん（79歳）

▶**略　歴**

戸石小学校から小須戸中学校へ。中学時代は柔道部に所属し、県中学校体育大会で中量級2位に入賞。巻農業高校でレスリングに転向。日体大に進学し、卒業後同大研究員として現在に至る

▶**主な戦績**

昭和55年、56年北信越高校大会60キロ級優勝（2年連続）
59年、60年全日本学生選手権68キロ級優勝（2年連続）
59年エスポワールワールドカップ（カナダ）68キロ級準優勝
62年アジア・アマレス選手権（インド）68キロ級優勝
62年ソウルインターナショナルレスリングトーナメント（プレ五輪）68キロ級準優勝

原選手にインタビュー

――今日の試合の作戦はどうでしたか。

最初の一、二分を思いきって飛ばしました。相手に勝つ自信はあったし、正直いってもっと差がひらくと思っていました。

――オリンピック代表の最終決定戦という緊張はありませんでしたか。

プレッシャーは全然感じませんでした。かえって第二次予選の方が緊張しました。

――六十八キロ級から七十四キロ級に一階級上げた不安はありませんでしたか。

不安は全然ありませんでした。とにかく、世界のひのき舞台に立ちたいと思っていました。

――最後の喜びのポーズは、思わず出たのですか。

ワールドカップのサッカーでやっていたので、一度はやってみたいと思っていました。

――ソウルオリンピックでの抱負はどうですか。

まだまだ六十八キロ級の力しかないので、猛練習をして七十四キロ級の力をつけ、ソウルでの上位入賞をめざします。

――市民の皆さんに一言

白根市からのオリンピック出場は初めてということなので、市民の代表として大いにがんばります。